

「そこにコーラスがあるから」

広田 美和

昭和五十二年春、次女が中学生になった時私共家族は日野市に転居しまして、次女は丁度その年に設立された日野市立三沢中学校に入学しました。

それから三十五年後の今年春、中学生になった孫娘がその中学校に入学しました。生徒数増加により、校庭のそばに、新校舎が一棟増設されていました。

当時 隣接する小学校にコーラスの同好会のようなものがあつたそうで、そのお母さん達が中学校の音楽の先生にお願いをして、「メンバーが三十人以上集まれば」という返事を貰い、新顔の私にも声がかかって、待望の「三沢女性コーラス」が発足したのでした。

大宅^{おおや}先生は経験豊かな現役の先生でしたから、聞き慣れた童謡や歌唱曲などではなく、耳に新しい曲や、先生御自身が作曲されたものをよく教わりました。みずみずしい詩とピアノ、アルトとメゾとソプラノ三部のハーモニーの中にいる時が

何よりもホツとするひと時でした。

月 草

室生 犀星 作詞
大宅 寛 作曲

秋はしずかに手をあげ
秋はしずかに歩みくる
かれんなる月草の藍をうち分け
つめたきものをふりそそぐ
われは青草に座りて
かなたに白き君を見る

時無草

室生 犀星 作詞
磯部 徹 作曲

秋のひかりにみどりぐも
ときなし草は摘みたまふな

やさしく日南ひなたにのびゆくみどり

そのゆめもつめたく

ひかりは水のほとりにしづみたり

ともよ ひそかにみどりぐも

ときなし草はあはれふかければ

そのしろき指もふれたまふな

(詩は楽譜からでなく詩集から書きうつしました)

沼

山村 暮鳥 作詞

大宅 寛 作曲

やまのうえにふるきぬまあり

ぬまはいのれるひとのすがた

そのみずのしづかなる

そのみずにうつれるそらの

くもは かなしや

みずとりはそよふくかぜにおどろき

ほと しづみぬるみずのそこ

そらのくもこそゆらめける
あわれ いりひのかがやかに
みずとりは

かく うきつしずみつ

こころのごときぬまなれば
さみしきはなもにおうなれ

やまのうえにふるきぬまあり
そのみずのまぼろし
ただひとつなるみずとり

川

高野 喜久雄 作詞
高田 三郎 作曲

何故 さかのぼれないのか

何故 低い方へゆくほかはないか

よどむ淵 くるめく渦のいらだち

まこと 川は山にあこがれ
きりたつ峰にこがれるいのち

山にこがれて 石をみごもり
空にこがれて 魚をみごもる
さからう石は 山の形
さかのぼる魚は 空を耐える

だが やはり 下へ下へと
ゆくほかはない 川の流れ

おお 川は何か
川は何かと問うことを止める
わたしたちもまた

同じ石を 同じ魚を みごもるもの
川のこがれを こがれ生きるもの

古い楽符を紐解く時、詩と曲の融合というか、歌詞もすばらしいけれど、その詩に最もふさわしい（と思える）曲を作られる作曲家のセンスに驚嘆します。いつも感動しながら歌っていました、どの曲もそうですが。

そのメロディーをこの紙面に載せることが出来ないのは、片手落ちで、本当に残念です。

大宅先生は最初にコーラスの指導をして下さった先生だから、いろいろ思い出す曲がありますが、中でも忘れられないのは「すいかとお母さん」という曲です。私には、軍医として年若い妻と二人の幼な児（従妹弟）を残して、白木の箱になって帰って来た叔父がいるからです。

すいかとお母さん

緑川 ふみ 詩

岡田 京子 曲

むかし むかし

ふたむかし

小さな家がありました

小さな家には

小さな畑

トマトが三本

キュウリが二本

空にむかって

すいかのつる

毎朝水をやりました

草もきれいにとりました

水をやるのはお母さん

草をとるのは二人のこども

お父さんはるすでした

遠い南の暑い島

てっぼうもって戦争に

すいか すいか

早く大きくなあれ

うんとあまあくなあれ

パイパイ たいこはんどこ

お祭りの日にお母さん

待ってたすいかを切りました

二人のこどもはとびあがり

すいかをガブリと食べました

種まであわててのみこんだ

お母さんはやさしく見ているだけでした

なぜ食べないの お母さん

大好きなすいかでしょう

「神様どうかおねがいです

二人のこどものお父さんを

ぶじにかえしてくださるなら
一生すいかは食べません」

夏がすぎてまた夏がきて

お母さんはすいかを食べません

戦争がおわって三年たって

ああ やっとお父さんが帰ってきました

小さい箱になって

顔もなく

手もなく

背中もなく

また夏がきて

二十回もの夏がきて

お母さんはおばあさんになりました

日本中のお母さんが

ただおいのりをしたただけだから
お父さんは帰らなかつたの
だからねえ

おばちゃんは孫の春子に云いました
知恵とちからのたんとある
こどもたちがみんなして

戦争をおしだすのだよ

地球のそとへ

ヨイシヨ　ヨイシヨ　ヨイシヨ

地球のそとへ

小さな家がありました

小さな家には小さな畑

トマトが三本

キュウリが二本

すいかのつるも

やっぱり のびていました

秋の歌

クリンゲマン

作詞

メンデルスゾーン

作曲

吉田 秀和

訳詩

たのしき うたはきえゆき
はるすぎて ふゆはきぬ
かなしき しじまのうちに
よろこびは うつろう

ものみな しずもりて
うたごえも おさまりて
きぎのはも おつる
野にひとの かげきゆ

たのしき うたはきえゆき

あるはただ なげきよ

ゆめかや こいのおもい

春より はかなく

春より あまかりし

すぎゆかぬものは ただ

むねこがす あこがれぞ

たのしき うたはきえゆき

かなしき しじまのうち

よろこびは うつろう

あわれ いずこ うつろう

吉田秀和氏は優れた音楽評論家として定評がありますが、
こんなすばらしい訳詩をなさるとは。

ゆけわがそよ風

ハイネ

作詞

メンデルスゾーン

作曲

三浦 和夫

訳詩

ゆけわがそよ風

おもいをのせて

かるやかにはこべ

きみがみもとへ

かるやかにはこべ

きみがみもとへ

きみにおくるわがことば

きかずや

かぜのごと

あとをしたうを

またきみ

まどろみにおちたるときは

あらわれるそのゆめに

わがまぼろし

あらわれよまぼろし

ハイネ（詩）とメンデルスゾーン（曲）の名曲です。

（楽譜からの写しなので、殆ど平仮名です。二回以上の繰り返しは省略しました）

海を見たくない今は

寺島 尚彦 作詞

” ” 作曲

一・青葉ごしに海が見え

あの日も咲いていました

たちあおいの花

その海のはるかなむこうに

あなたはいました

美しい歌たちといつも一緒に

二． 青葉ごしに海が見え

あの日も咲いていました

たちあおいの花

新しい月日を夢に見て

あなたに会うため旅に出た

その朝をおぼえています

三． いくたびか春がすぎ

今年も咲いていました

たちあおいの花

けれどあの日とちがうのは

この広い浜辺にかぎりなく

うちよせる波のさびしさ

星の国はどんなですか

星の国にありますか海は
星の国で歌っていますか
今夜はすぐく海が静かで
思い出が海の上を渡ってくるきつと

その海のはるかなむこうに
あなたはもういない
だから だから
海を見たくない今は
今は海を見たくない
だから だから
海を見たくない今は
今は海を見たくない
あゝ あゝ

寺島尚彦氏は、沖繩戦の悲劇を歌った「さとうきび畑」の作詞作曲者として知られています。特に反戦詩人という作風ではないようです。

日のあたる坂道

ランゲ

作曲

南 安雄

編曲

海野洋司

作詞

一 日のあたる坂道にため息がひとつ
日のあたる坂道をころがってゆく

二 日のあたる坂道にただひとり立てば
止まらない止まらないかけめぐる夢

あの頃のわたしが走ってくる

赤い自転車と白いドレス

少女のほほえみ

日のあたる坂道のむこうは青空
なつかしい友達の名を呼んでみる

この坂のほかにはみんなもう

見なれないものばかり

人ごとのように過ぎた日

忘れた空の色

みんなすきですみんな

でもなぜか今ただひとり

誰かこのわたしを知っていますか

あの日の少女を

日のあたる坂道に咲いている花を

手にとれば目にしみるあの頃の色

風は歌うよ古びたあの歌

帰らない夢

ランゲの「花の歌」を編曲したものです。すばらしい曲と詩、情景が目には浮かびます。

。三十四年の歳月の間には、多くのすぐれた指導者と、数え切れないほどの合唱曲に出会いました。喜びや悲しみを共有してきた仲間も、高齢や家庭の事情などでコーラスを続けるのが困難になり、残り五名になって、遂に平成二十三年、解散となりました。

今年の春、コーラスの友人に誘われ、教室の見学に行ってみました。指導者は、

「日野市民合唱連盟」でよくお見かけする川妻干たでくに邦先生で、三十数人の混声四部合唱団です。そしてめぐり合ったのです。「水のうぶすな奥秩父」という曲に。

甲武信こぶしヶ岳だけの霧から生まれ落ちたひと雫が、泉となり沢となり、長瀨などの

景勝地を形成しながら、隅田川となつて東京湾に注ぐという雄大な物語曲です。

（大倉芳郎作詞 池辺晋一郎作曲）

やっぱり、コーラスは止められません。